

【Flow】

新・奥会津だより vol.6
2022 Autumn

福島県奥会津の暮らしに息づく伝統文化は、只見川・伊南川とその支流に集約される豊かな水の流れの中で育まれてきました。Flowは、奥会津の宝である「豊かな自然・伝統文化・ここで生きる人」を、皆さんと見つけていく情報紙です。



みんなで楽しく創作して
マタタビ細工を未来に継承

奥会津をつなぐ人々
— 金山町 —

山に自生するマタタビを使い、生活の道具をつくる。「金山町民芸品創作研究会」は、冬の「てわさぎ」として受け継がれてきたマタタビ細工に取り組む団体だ。みんなでワイワイガヤガヤ楽しみながら時代にあった新しいものを創作することで、金山町が誇る伝統技術を次世代へと伝えている。

町に自生するマタタビを生かしてつくる生活の道具

やわらかな白色と繊細な編み目が美しい、真新しいザル。その材料は金山町の山に自生するマタタビだ。「子どもの頃は親父がつくってた、米とぎザル、小豆漉し、菜っぱを入れるザルとか、あの頃は必要なのは自分らでつくったんだ。そう教えてくれたのは、マタタビ細工づくりを行う『金山町民芸品創作研究会』会長の青柳雄一さんだ。うちの爺さんも冬になると山からマタタビを採ってきてつくっていた」と、事務局長の菅家哲夫さんが続ける。青柳さんも菅家さんも、マタタビ細工を始めたのは60歳を過ぎてから。実際にやってみたらおもしろくてハマったと笑う。

元々マタタビ細工は農閑期の冬に男性が行う「てわさぎ(まじ仕事)」の一つだった。しかし一人が大人になった頃にはプラスチック製やステンレス製の安価なザルが普及し、家庭でマタタビ細工をつくることはなくなった。その後は町内の各地区の老人クラブが冬の活動の一環としてマタタビのザルなどを製作。町も奨励したことで、マタタビ細工の技術が途絶えることなく継承されてきたという。

現在は、2009年に結成された金山町民芸品創作研究会が技術継承の役割を担っている。会員の一人、市川里美さんは14年前に金山町に移住し、マタタビ細工に出合った。「自分で材料を探りに行き、自然の恵みを使って生活の道具をつくるのが魅力ですね」と笑顔を見せる。(左頁へ続く)

「みんなで楽しむ」を大事に時代にあったものを創作

金山町民芸品創作研究会のメインの活動は、毎年12月から2月にかけて開催されるものづくり講座だ。金山町中央公民館と金山町老人クラブ連合会の主催で、研究会は指導協力という形で関わり、町内外の参加者にマタタビの加工の仕方からザルのつくり方まで教える。「教えるというより一緒につくる感じ。みんなで集まってワイワイガヤガヤすると、会員同士もお互いの技を真似したり酷評したりして(笑)レベルアップできる。こうやっていろんな人が次から次に師匠になる形が、技をつないでいく一番有効な方法なんじゃないかな」と菅家さん。コロナ禍以前は毎年、三島町の「ふるさと会津工人まつり」に出店し、会員たちが切磋琢磨してつくった自信作を販売。お客さんに喜んでもらえるものをたくさんつくって、さらに競い合っ腕を磨く好循環が生まれたという。

市川さんは現在、またたび工房(福地)を立ち上げ、伝統的なマタタビのザルのほか、バッグ、アクセサリ、小物なども製作・販売している。そんな市川さんの活躍を、青柳さんと菅家さんは嬉しそうに見守る。その背景には、研究会初代会長の故・諏佐信平さんの思いがあるという。諏佐さんの口癖は「来る者は拒まず去る者は追わず」。マタタビ細工を習いたいと来た人には技術を全部教える。その後、何をするかは各人の自由。「自分たちはマタタビ細工の保存会ではなく、創作研究会。『欲しい』と思われればものをつくるために、どんどん新しいことに挑戦してください」。諏佐さんが常々口にしていた言葉が、今も研究会の精神として受け継がれている。

金山町民芸品創作研究会の最大の目標は、金山町のマタタビ細工の技術を絶やさず次世代に継承することだ。「町の山にマタタビがあるわけだから、それを使っていろんな作品をつくって、みんなで楽しむのが一番ではないかな」と青柳さん。菅家さんも思いは同じだ。研究会の活動理念を一言で表すと温故知新。金山という土地、環境、生活の中で生まれ育まれてきた生活工芸文化を大事にして、みんなでワイワイガヤガヤ楽しみ、互いに競い合いながら、今の時代にあった魅力あるものをつくれればよいなと思っています。金山町のマタタビ細工はみんなで楽しむてわさぎとしてこれからも愛され、未来へと受け継がれていく。

でも製作・販売している。そんな市川さんの活躍を、青柳さんと菅家さんは嬉しそうに見守る。その背景には、研究会初代会長の故・諏佐信平さんの思いがあるという。諏佐さんの口癖は「来る者は拒まず去る者は追わず」。マタタビ細工を習いたいと来た人には技術を全部教える。その後、何をするかは各人の自由。「自分たちはマタタビ細工の保存会ではなく、創作研究会。『欲しい』と思われればものをつくるために、どんどん新しいことに挑戦してください」。諏佐さんが常々口にしていた言葉が、今も研究会の精神として受け継がれている。



金山町民芸品創作研究会は2009年、ふるさと会津工人まつり参加をきっかけに結成された(当初の名称は金山町民芸品創作研修会)。会長の青柳雄一さん(写真右)はJR東日本、事務局長の菅家哲夫さん(同左)は金山町役場を退職後、研究会に参加。11年前に会員となった市川里美さん(同中央)の作品は会津若松市の会津ブランド館などで購入できる。

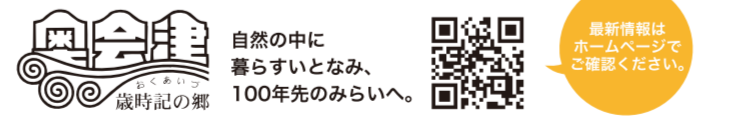
金山町民芸品創作研究会
TEL:090-4552-4712(菅家さん携帯)

読者の声

- Flowには、そこに住まないといけないような地域密着型の情報が書かれていて、送られてくるのが楽しみです。4号の木地づくりも興味深く、ぜひ体験してみたいと思いました。以前は毎年暇があれば只見を拠点に柳津や昭和、南郷、檜枝岐あたりまでバイクにキャンプ道具を積んで足しげく通っていました。いつかまた奥会津に行く機会があればいいなと思っています。(千葉県館山市・SSさん)
- 3号の奥会津風土記、ヤマグルマからトリモチを作ることは初耳でした。私は横浜生まれの横浜育ちで、横浜ではモチノキから作ります。木の皮をはぎ取り、道具が揃えば30分で出来上がりです。今度は孫に作り方を教えようと思います。(横浜市緑区・INさん)
- 3号の奥会津風土記は人と材木の関係と歴史、開拓者の墓印と伝承される樹木、本当に珍しく、檜枝岐村の奥深い歴史の姿を見ました。(岡山県倉敷市・NHさん)

新・奥会津だより「Flow」編集部(株式会社日進堂印刷所内)
〒960-2194 福島市庄野字柿場1-1
TEL:090-6852-0953(専用電話) FAX:024-594-2041
Eメール:flow@nisshindo.co.jp

ご意見・ご感想をお寄せください。奥会津だよりの定期購読を希望される方は、編集部まで、発送先(ご住所・お名前)をお知らせください。個人情報取り扱いにつきましては適切に管理を行っています。詳しくは、日進堂印刷所のホームページをご覧ください。



只見川電源流域振興協議会
〒968-0006 福島県大沼郡金山町大字中川字上居平933番地
奥会津振興センター内
TEL:0241-42-7125 FAX:0241-42-7127
Eメール:tdrsk@okuaizu.net

只見川電源流域振興協議会の主催・共催事業については、最新情報をホームページで随時公開しています。この冊子は電源立地地域対策交付金の事業より作成されています。



10月半ばから冬に採取したマタタビの蔓の皮を剥いて四つ割りにし、厚さを均一にした後、幅を揃える。このヒゴづくりにも最も時間と手間がかかる。



ヒゴをつくり、材料が揃ったら組み(底の部分)と編み(横の部分)に取り掛かる。編みと組みに使うヒゴは厚さが微妙に異なるそう



米とぎザル、そばザルなど、青柳さんから会員のマタタビ細工は道の駅「奥会津かねやま」で購入できる。菅家さん作の弁当箱は受注生産の逸品

ただでん 掲示板 vol.6



只見川電源流域振興協議会からのお知らせ

記念講演会「写真と民俗学」を開催します。
奥会津の5施設にて開催中の「写真展 懐かしき東北・美しき東北 ～福島県立博物館所蔵国際交流基金寄贈写真から～」につきましてたくさんの方に来館いただき、誠にありがとうございます。写真展の開催を記念し、講演会「写真と民俗学」を下記により開催いたしますのでぜひお越しください。
日時:10月8日(土)13:30～15:30
会場:ただみ・モノとくらしのミュージアム(南会津郡只見町大字大倉字窪田30)
講師:久野俊彦氏(ただみ・モノとくらしのミュージアム館長) 赤坂憲雄氏(奥会津ミュージアム館長・学習院大学教授)
定員:先着20名(申込不要)

東北電力主催「奥会津展 ～只見線全線運転記念! MIO no SATO奥会津～」を開催します。
仙台に奥会津7町村の食や伝統工芸をはじめとした地域産品が大集合! 三島町の編み組細工、金山町の奥会津金山赤カボチャなど、普段手に入りにくい奥会津自慢の逸品を購入できるチャンスです。これに併せ、10月1日からの只見線全線再開を記念しお子様も楽しめるイベントが盛りだくさん! 魅力沢山の奥会津展を、ぜひお楽しみください。
日時:9月21日(水)～23日(金・祝)10:00～18:00(初日は10:30から、最終日は15:00まで)
場所:東北電力グリーンプラザ(宮城県仙台市青葉区一番町3-7-1 電力ビル1階)
(お問い合わせはこちらまで)
只見川電源流域振興協議会(担当:須佐、星)
TEL0241-42-7125(平日8:30～17:15受付)



奥会津の美術館資料館

7月22日に開館した『ただみ・モノとくらしのミュージアム』と、映画公開で話題になった『只見町河井継之助記念館』。今回は、只見町の2つの注目施設を紹介いたします。

QUIZ

ただみ・モノとくらしのミュージアムからのクイズです！
答えを知りたい方は、ただみ・モノとくらしのミュージアムへ
Go!

当館には紀年銘墨書のある民具がいくつも収蔵されています。墨書によってその民具がいつ作られたものか正確に知ることが出来ます。展示ホール入口そばに展示されているトウミ(唐箕)もその一つです。これは只見町で最も古いトウミですが、いったい何年に作られたものでしょうか？



ただみ・モノとくらしのミュージアム 学芸員 原永門香さん

— 只見町 —

ただみ・モノとくらしのミュージアム 貴重な民具を収蔵・展示する新施設

町民が自ら整理した生産用具と仕事着 2,333点が国指定重要有形民俗文化財に指定

旧会津只見町古館を全面改修し、隣接する本館を新設した『ただみ・モノとくらしのミュージアム』。本館2階の民具収蔵庫の棚には、かつて農作業や山仕事に使われていた生産用具が、ゼンマイ採り、水田稲作、漁撈などのジャンルごとにとずらりと並び、作業時に着た仕事着も多数保管されていて壮観だ。「これらは実際に使っていた町民の方たちが磨き、民俗資料調査カードに記入して整理したものです。この民具の整理法は「只見方式」と呼ばれています」。学芸員の原永門香さんが解説する。

原永さんによると、只見町で民具の収集が始まったのは1965(昭和40)年から。農業の機械化や家の建て替え、さらに洪水被害やダム建設による集落移転で捨てられる民具が増える中、消失の危機にある民具を残そうという気運が高まり、収集が始まった。そして1989(平成元)年から、当時としては先進的だった只見方式による民具整理事業がスタート。実に1万点以上の民具が整理され、2003(平成15)年、その中の生産用具1,917点、仕事着416点、合計2,333点が「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」として国指定重要有形民俗文化財に指定された。



普段用の仕事着のほか、刺し子が施された晒れ着も展示されている



職人巻物は只見や金山周辺で見られ、職種ごとに存在する

採ったゼンマイを入れる「クモッケツ＝蜘蛛の尻」



最期の5日間を過ごした家の3部屋を移築した「河井継之助終えんの間」

司馬遼太郎の書や貴重な資料など見どころ多数

時代を駆け抜けた継之助が眠るにふさわしい、山紫水明の別天地。映画の原作である小説『峠』の連載後に塩沢を訪れた司馬遼太郎は、感慨を込めて「山水相應蒼龍窟」「壺中天」と揮毫した。館内にはこれらの書のほか、長岡藩士が使用したミニエー銃や松平容保の書状などの貴重な資料を含む多彩な展示があり、継之助の生き様に触れられる。11月20日(日)までは「開館50周年 峠 最後のサムライ企画展」を開催中。映画で使われた道具や衣装を間近で見られるので、この機会に訪れてみては。

DATA ただみ・モノとくらしのミュージアム

只見町大字大倉字窪田30
TEL:0241-86-2175
開館時間:9:30-17:00(入館は16:30まで)
休館日:月曜日(祝日の場合は翌平日)、年末年始(12月29日～1月3日)
入館料:無料 ※民具収蔵庫の団体見学は事前予約が必要



多彩な民具を見学できる展示ホール。仕事着を着たマネキンが点在しているのも特徴だ

只見ならではの貴重な民具や資料を展示 民具に触れたり仕事着を着る体験コーナーも

展示ホールでは、11月3日(祝)まで開館記念展「会津只見は民具がいっぱい! 1万点 国指定民具の大公開」を開催。国指定重要有形民俗文化財の中から厳選した281点を展示している。儀式の詳細などを記し、屋根葺き職人や猟師、きこりの間で師匠から弟子に伝授された職人巻物、ゼンマイ採りの際に着用した「クモッケツ」や刺し子の足袋「サンツタビ」など、只見ならではの貴重な品々は必見だ。上着が「シゴトシ」、下に履くものが「ユッコギ」と呼ばれる仕事着は、今見ると意外とおしゃれに感じられて楽しい。

実際に民具に触れたり、ツル細工やワラ細工を体験したり、仕事着を着て写真撮影ができる「みんぐふれあいホール」があるのもこの博物館の特徴。渡り廊下のギャラリーには、町民が書いた民俗資料調査カードやクリーニングに使った道具、当時の写真などが展示され、只見方式による民具整理の歩みが見える。町民の手によって守られた民具は、まさに只見町の宝。ぜひ実際に見て、触れて、体験してみたい。

— 只見町 —

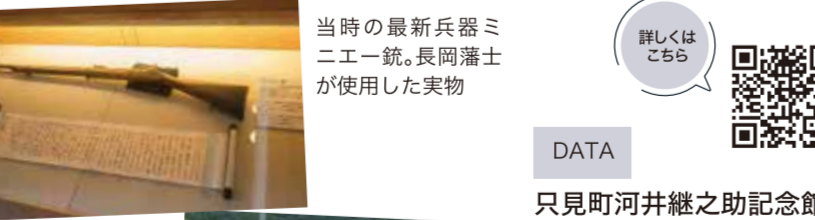
つぐのすけ

只見町河井継之助記念館

義のために戦った“幕末の風雲児”の生き様に触れる

6月に公開され話題となった映画『峠 最後のサムライ』。主人公の長岡藩家老・河井継之助は革新的な藩政改革を行い、戊辰戦争の際は武装中立を目指した“幕末の風雲児”だ。西軍との和平会談が決裂し、軍事総督として奮戦するも長岡は落城。自らも負傷した継之助は八十里越えを越えて会津若松へ向かう途中、ここ只見町塩沢で42年の生涯を閉じた。

『只見町河井継之助記念館』には、継之助が死去した村医・矢沢宗益の家の一部が「終えんの間」として移築保存されている。1964(昭和39)年の滝ダム建設の際、当主の矢沢伊織氏がなんとか残したいと自費で移築して水没を免れたもので、柱や欄間、襖などは継之助が亡くなった当時のままだ。同記念館の開館は1972(昭和47)年と、故郷・長岡市の記念館よりも早い。「長岡を戦火に巻き込んだ張本人という見方もあり、地元での継之助の評価は二分されていました。でも、只見の人にとって継之助は会津のために戦ってくれた英雄なんです」。職員の新國由利さんは、矢沢伊織氏をはじめとする町民の想いを代弁する。



当時の最新兵器ミニエー銃。長岡藩士が使用した実物

詳しくはこちら



DATA

只見町河井継之助記念館
只見町塩沢字上の台850-5
TEL:0241-82-2870
開館時間:10:00-16:00(最終入館)
開館期間:4月下旬～11月中旬
休館日:木曜日、荒天日
入館料:大人350円、
小・中学生200円



記念館2階から外に出ると継之助終えんの地を望める



菅家博昭プロフィール

1959年生まれ、昭和村在住、花農家。会津学研究会代表、昭和村文化財保護審議会委員長を務めるなど、会津地域を中心に調査を続けている。著作に『宇(からむし)～地域資源を活かす生活工芸双書』『暮らしと繊維植物』など。



令和の奥会津風土記

～むらをあろく～ 金山町八町地区編

会津学研究会 菅家 博昭



奥会津といえは水田が少なく、しかし畑を中心に繊維植物等の換金作物を発展させて土地柄を活かしてきた。その事例について、金山町八町を歩きながら考えたい。奥会津の基層文化を考察するための基本を見て歩いた。

八町は、『新編会津風土記』では二十七軒と記載されている。昭和村大芦の五十嵐伊之重が明治十七年(一八八四)に『大日本農会』四十号に書いた論文

の表を参考にすると、現在の昭和村・金山町・柳津町・只見町・南会津町(旧南郷村)でからむしが生産されている。明治十六年(一八八三)の産出額は別表の通りだが、八町では十二個単価が十九円とある。これから推定すると一町二反以上のからむし畑があったと推察される。現在の昭和村の栽培面積の倍以上である。いまから一三九年前のこと

八町の人たちの自慢は、六地藏が二カ所にある、ということ。その背に刻まれた年号を見ると享保十年(一七二五)の三月と五月である。金山町では今年(二〇二二)七月二日に南山御蔵入騒動三百年のシンポジウムが開催されたばかりだが、小栗山喜四郎などが処刑されたのが享保七年(一七二二)である。

金山町の赤カボチャの発祥の地も八町と言われている。他所からの種子を栽培していたのだが、おいしかったため栽培が広がった、という。八町の北西側の畑でも赤カボチャはパイプハウスで栽培されている。六地藏はその近くにある。また八町を遠望できる湯ノ上地区の赤カボチャの栽培地にも多数のパイプハウスが建つ。こうした隔離した場所を選定しているのは他種カボチャとの交雑を避けるためである。

明治16年からむし産額面格表 (五十嵐伊之重調べ)

地名	個数	平均1個価格
①大芦村	60	30円
②佐倉村	15	29
③小中津川村	40	25
④栗原村	14	25
⑤嶮丸村	15	24
⑥下中津川村	71	24
⑦野尻村	100	24
⑧小野川村	12	21
⑨松山村	12	21
⑩桂原村	1	18
⑪玉梨村	7	20
⑫八町村	12	19
⑬小栗山村	12	18
⑭山口村	11	18
⑮中川村	11	17
⑯山入村	4	18
⑰布沢村	20	22
⑱小林村	7	18
⑳下山村	8	18
㉑梁取村	4	18
㉒界村	10	18
㉓宮床村	6	18
㉔山口村	12	17
㉕鶴巻村	11	17
㉖亀岡村	12	17



現在の主要道路に明治時代の村名を配置 からむし栽培地(明治16年)

こうしたことを考えながら集落を歩くと、巨大な石造物、たとえば湯殿山、六地藏は村の二カ所にあるなど、多くの石造物を建立するほど経済活動の盛んなことが推察できる。石造物、鎮守、昭和五十年に立て替えた観音堂などは、往時の経済力の反映であるからである。

この鎮守の前に家がある押部光男さん(昭和八年生)、文利子さん(昭和十四年生)に屋敷周りの植物や野菜、水場などを見て話しをうかがった。大きな池が印象的であった。

この場所から八町集落の上の尾根に岩場が見える。この立岩はハラミイワと言われているが、山仕事、焼畑の管理に行っていた際に、岩場の日陰の具合で時間を読んでいた。そして昼ご飯(ハラミ)、あるいは作業終了の時間を特定していた。八町から沼沢湖の上野沢に抜ける峠は、『シラドリー(白鳥)』と呼ぶ。『新編会津風土記』では白鳥山(しらとり)と与志留山(よしとめ)の記載がある。

2 二つの六地藏



八町の人たちの自慢は、六地藏が二カ所にある、ということ。その背に刻まれた年号を見ると享保十年(一七二五)の三月と五月である。金山町では今年(二〇二二)七月二日に南山御蔵入騒動三百年のシンポジウムが開催されたばかりだが、小栗山喜四郎などが処刑されたのが享保七年(一七二二)である。

3 二荒神社



オミヤと呼ぶ鎮守は二荒神社で、『新編会津風土記』には玉梨村に日光神と記載がある。

5 白鳥と早坂峠

